史料室だより No.49
東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1997年３月18日

特 集

「母の会創立60周年記念事業」

「1882年、カナダ・メソジスト教会婦人伝道会社の委員会は日本で伝道に従事する若い婦人の出現をまっていたが、カナダのハミルトン市にあるセンテナリー教会の会員マーサ・J　カートメルが名乗りでた。センテナリー教会の婦人グループは精一杯の善意の献金をカートメルに贈って日本に送りだした。」と百年史に記されています。ミス・カートメルを初穂として、第二次世界大戦中の数年は中断されましたが1996年に帰国されたミス・ブラウンまでカナダ合同教会は東洋英和女学院に宣教師を派遣し続けました。宣教師の先生方の信仰が歴代の生徒に与えた影響はまことに大きいものであり、東洋英和女学院の教育のバックボーンとなってきたのです。「目で見る東洋英和女学院の 110年」には宣教師団の写真が載せられていますが、1889年と1910年の写真には11名、1954年には８名の宣教師のお姿が写っています。カナダとの交流が希薄になることを恐れた、元司書教諭朽木久子先生は、カナダ学習旅行を長い時間をかけて企画し1993年に第一回カナダ学習旅行が行われました。これからは隔年に実施される予定です。

母の会が創立60周年事業の一つとしてカナダとの交流のための基金を創設されたことは、まことに喜ばしいことです。阿部会長のご報告にもありますように、将来はカナダと英和との交換留学制度が確立されることを熱望しています。

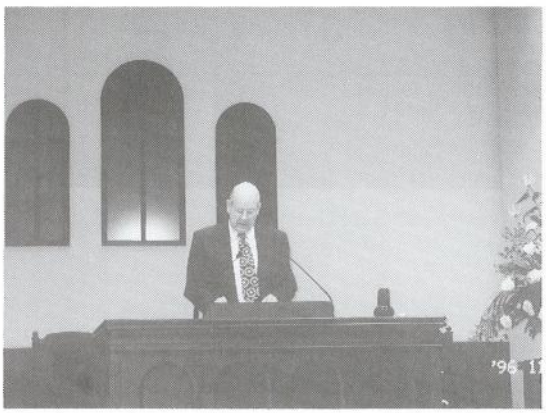
1996年11月６日　創立記念日に新マーガレツト・クレイグ
記念講堂で高等部の生徒に対して行なわれた。

センテナリー教会ルール牧師講演

（元高等部教頭　　小池久子先生　訳）

カナダオンタリオ州ハミルトンにあるセンテナリー教会からご挨拶申し上げます。ハミルトンのセンテナリー教会と東京の皆さんの学校とは、ある偉大な人物を共有しております。この学校の創立者であり、85年にわたってセンテナリー教会の敬虔な会員であったマーサ・ジュリア・カートメルです。皆さんの学校の標語「敬神・奉仕」はマーサ・カートメルの生涯のモットーであったと思います。彼女の生涯は日本の愛する学校とカナダの愛する教会との中に深く混じり合っていました。ミス・カートメルは1882年に日本の若い人達、とくに女性への大きな望みをもってこの地にまいり

ました。彼女の愛する神、創造主への敬神の思いと、神に仕え、人に奉仕するという敬虔な望みとをもってまいりました。つまり敬神奉仕です。この標語が長い間失なわれなかったことはあきらか



です。若いみなさんが1996年の今年もまだ、ミス・カートメルの信仰を受け継いでいることは明らかです。ミス・カートメルがこの国に来て一つの光が点されました。この長い年月の間この光は消えたことはありませんでした。確かに１、２回薄暗くなったことはあります。いまわたしの心に浮かぶのはミス・カートメルの影響を表している詩です。

日陰の塀のそばに一本のばらが生えていた
神の自由な光の中で蕾となり花開いた
朝露の水をうけ　養われて
甘い香を日夜放った

ばらは成長し大きく立派に花開いた
ゆっくりと高潔な高みにのぼり
塀の中の割れ目にまで達した
そこからは一筋の光が輝いていた
ばらは　さらに力強く這い登った

恐怖も高慢な思いももたずに
割れ目に沿って射しくる光にしたがって
そして　反対側で開花した

光も露も開けた視界も
前と同じだった
ばらは新しく美しく自由に
ますますその香りを放った

広く遠くに香りを発散させていた
すぎし時代とおなじように
反対側にいたときとおなじように
今後も永久に同じ薫りをはなつでしょう

センテナリー教会はミス・カートメルを会員としてだけでなく、キリストにあって神の愛を語り、教え働くために、最初の婦人宣教師として日本に派遣したことをも誇りにしています。1882年当時は世界は広大でした。国から国へ行くのに何週間もかかったのです。私と妻はカナダのトロントから東京まで14時間しかかかりませんでした。みなさんはこの年月の間に世の中がどんなに発達したか、変わってしまっているかがお分かりでしょう。しかし、変わっていないこともあります。この学校が教育にかける責任と皆さんのクリスチャン生活への献身です。それはミス・カートメルが彼女の学校と若い生徒たちに求めた２つの「敬神・奉仕」の要（かなめ）です。それがいまでも変っていないことを創造主、神に永遠に感謝すべきです。センテナリー教会はここ数年、この学校の明るく愛らしい婦人たち ― 生徒達と先生方 ― をお迎えする特権を与えられてきました。何回かの訪問に接し、私は来られた人達がセンテナリー教会に対し、ミス・カートメルの思い出に対し深い畏敬の念をもっていることに気付きました。礼拝堂で礼拝を捧げ、校歌を歌いました。生徒たちの態度はミス・カートメルが生徒に望んだであろう、正にその通

りでした。彼等は神に栄光を帰し、マーサ・カートメルの記念として敬神・奉仕を示したのです。これこそ遠い昔、彼女が達成したいと努力していたことです。私やセンテナリー教会の会員たちは彼女の努力が実ったことを目にしました。先生方や学院関係者は若い訪問者を大いに誇りに思うべきです。彼等は伝統と教育と学校の基となっているものを見、確認するために、はるばる日本からやって来たのです。ミス・カートメルは自分が日本に居たことの影響がこんなに長い間、これほど多くの人々にあるということを実感していたでしょうか。

112年前に一つの夢が芽生えました。なにか新しいことが起こり始めました。その夢はセンテナリー教会の婦人会の小さな部屋に根を下ろし始めました。マーサ・カートメルはある人々のように夢を部屋に閉じ込めたまま、結局は消滅させてしまうことはありませんでした。この夢から何かが起ると確信していました。偉大な光が突然彼女に射して、彼女の夢をどうしたらよいか、夢を実現するためにはどこへ行くべきかが示されると信じていました。神がこの若い婦人に語りかけ、日本を指し示したのは明らかです。中国やアフリカあるいはインドでないのは何故かという人がいたでしょう。カナダの人々と共に大事な仕事を成就することもできたでしょう。でも、彼女はそうはしませんでした彼女は神の声をきいたのです。彼女を差し招く神の手を見たのです。そして神の地上の計画のなかにあるこの特別な葡萄畑に導かれたのです。神の地上の計画、それは、神の人々、子どもたち、被造物のすべてがイエス・キリストのよきおとずれを聞くという計画です。1884年の創立より多くの事が起りました。この学院は着実に発展してきました。教育の分野だけでなくクリスチャンの生き方の真の道を示す試みにおいてもです。

私は東京で、特にこの学校で、短い滞在ですがみなさんが学校に対して持っている誇りを感じています。先生方や職員の方々の中にも、この学校は学校の中の学校だという自覚があります。偉大な伝統と歴史があれば誰でも誇りに思うでしょう。皆さんはここで沢山のことを学び、人生に関する正しいことと、間違ったことの区別が分かるようになります。この認識がマーサ・カートメルがこの学校に、またこの学校の門をくぐるすべての人に持っていて欲しいと望んだ人生の最も大切な要素です。彼女は生徒が学業を終えた後も、人生で彼等の前になげかけられる多くの試練や誘惑に直面しなければならない事を悟っていました。皆さんの一番大切な教訓であり、卒業後に自分のものにしなければならない教訓は、何が正であり、なにが邪悪であるかを知り、その区別が分かる事を確認することです。これはミス・カートメルが昔おこなった教育と人生に対する基本的な態度の一つです。この学校は今までずっと、素晴らしい教師集団を持ち続けています。その先生方は学校の標語「敬神・奉仕」をしっかり守っています。本日私はみなさんの顔をみて、1884年の創立の夢が実現した事を知り、目にすることができました。これは若いマーサ・カートメルが日本に着いた時

の夢でした。またこれは故国を離れ、マーサ・カートメルに続いて日本まで旅してきた多くの宣教師たちの夢でした。ミス・カートメルと彼女に続いた人々の夢が実現したということにみなさんも同意して下さると思います。これはみなさんの人生の素晴らしい部分です。そしてみなさんの成長の過程です。卒業後もみなさんすべてが深い敬神の心とこの学校に対する誇りを持ちつづけるよう祈ります。そして求められた時には力を尽くして学校のため奉仕しつづけるよう祈ります。

「母の会60周年記念」によせて

1995年度母の会会長　　阿部　恵代

私達が母の会の本部役員を、お引き受け致しました1995年（平成７年度）は、丁度ハミルトン校長が永眠なさって20年。そして先生が、母の会を組織化なさいまして60周年という記念すべき年でございました。幼い頃お見受け致しましたハミルトン先生は、お背が高く大変威厳に満ちた方でいらっしゃいましたが、やさしい笑顔が子供心に暖かく残っております。その様な先生の記念すべき年に母の会の御用をさせていただける事に、少々の誇りと責任を感じた我々役員一同は、以下３つの事を実現したいと考えました。

第一に何と云ってもこうして60周年を迎える事ができましたのは、先輩役員、委員の皆様方あっての事ですから、何か感謝の意を表したいこと。第二に後に残る記念品を何か考えたいこと。

第三にお世話になったカナダ合同教会に交流基金を設立しては如何か、という事です。

凡て「母の会創立60周年記念行事」として、バザー、クリスマス礼拝、そして今年は特別に観劇会も催そうという事となりました。そこでクリスマス礼拝の時に、歴代の役員にお声をかけ、祝会にご出席戴く事になりました。皆様暮れのお忙しい中快く御出席下さり、献金もお会費も戴き恐縮致しました。先輩方のお働きがあって初めて私達が引きついでまいれるのですから、先輩の皆様方が力を尽されたこの母の会の今日の様子を見ていただきたかったのです。世の中にＰＴＡもなかった学院創立当時からのこの母の会の存在の大きさに改めて感謝し、英知の歴史の中にいつまでも母の会が輝いています様念じております。

第二の記念品ですが、これはもう実にぴったりの品が与えられました。それは銀座教会でアフリカの大学に寄付をするため、ジンバブエの彫刻展が開かれていたのですが、その折りに新校舎のお庭にふさわしい作品を見つける事ができました。そして第三に私達が一番力を入れましたのが「カナダ合同教会交流基金」の設立でございました。長い間カナダの教会から様々な恩恵を受けるばかりで、何もお返しをしていないので、今回初めてカナダの教会の援助なくして新築されました新校

舎も見ていたゞきたく、まずロジャース先生をそして、カナダ学習旅行の時生徒達がお世話になる、ミス・カートメルの母教会、センテナリー教会のルール牧師ご夫妻を日本に御招待する事になりました。センテナリー教会には、ミス・カートメルの記念の部屋があり、先生の遺品や東洋英和の資料が今もって保管されているのは、ルール夫妻のご尽力によるものです。そこで礼拝を捧げる生徒達は、大層感銘を受け、又牧師夫妻の暖かい人柄にふれるのです。日程は後に記しますが、1996年11月6日、112 周年の創立記念日にマーチン・ルール牧師の記念講演会が行われました。内容は小池先生が訳して下さった通りでございます。

「交流基金」についてでございますが、まず平成7年度の楓祭、バザー、聖書の会の折の物品販売に加え観劇会を致しました。それは第一回目の講演会では大野晋先生に「日本語のなりたち」について話していただきましたので、第二回目は、市川猿之助さんに「歌舞伎について」話したいたゞこうと考えたのです。その時猿之助さんが、平成8年から5年間春秋会（自主公演）をなさるという事で、第一回目の時に「母の会創立60周年記念観劇会」として、母の会だけでなく、同窓会会員の方々にもお声をかけたのです。皆様方にご協力いたゞき、国立劇場で思いがけない方とお目にかかれた、とのお話も伺いました。引続き平成9年も観劇会を行い、又来年も計画致しております。初めての時の御案内には「観劇会の献金は、カナダメソジスト教会＝合同教会と、生徒達が伺ってお世話になっておりますミス・カートメルの母教会、センテナリー教会との交流を深めるために役立つように致したいと思っております」と書かれており、まだその当時は、はっきりとご招待する相手が決まっていなかった事を、物語っております。平成9年の「春秋会」の御案内には、基金を設立できた事への御礼と、ロジャース先生と、ルール夫妻をご招待した報告が記されており、又今年度の目的は、「東洋英和において、カナダ合同教会から派遣された最後の宣教師、ミス・ブラウンを再び日本にお招きする日がくる様に願って」と記されております。ブラウン先生はご帰国されたばかりですので、まだ先の事と思いますが、平成10年の文面に「将来的には、カナダ、英和間の交換留学等、夢のような希望も膨らんでまいりました」と記されるまでに至りました。平成7年度の収益と、観劇会の献金、今後の母の会の協力を得て、この基金が大きく育ってまいります様神様にお願いしております毎日でございます。

センテナリー教会と東洋英和女学院

高等部　　廣井　理加

カナダにいる多くの人々の清らかな想いが一人の人に托され、そうした想いを荷った人々の行いの結晶が、百年以上も日本で受け継がれている。その間に濁った想いが一つでも入りこんでいたら、これ程、美しい結晶のままではいられなかったでしょう。センテナリー教会と東洋英和女学院との関わりを拝見しておりますと、人々の想いの偉大さとお導きくださる神の御手の恵み深さに心洗われる思いがいたします。

簡単にセンテナリー教会と東洋英和女学院との関わりを百年史より引き、年譜にしてみました。

1765　ニューファウンドランド島にてローレンス

・カウランが説教開始。

1781　ノヴァスコシヤ半島に、ウィリアム・ブラックが牧師として定住。

1791　アメリカのメソジスト監督教会がオンタリオ湖地方の王党派に伝道開始。

1824　カナダ・メソジスト監督教会が米国の同教派から分離独立。（最終的には1828年に決定）新設の教会は伝道会社を組織した。

1832　カナダ・メソジスト監督教会は、アッパーカナダのウェスレーアン・メソジスト教会と合同し「カナダ・ウェスレーアン・メスジスト教会」と称する。

1855　イギリス本国のウェスレーアン・メソジスト教会に所属していた東部カナダのウェスレーアン・メソジスト教会の牧師たちがファリファックス市に会合し、東部英領アメリカの年会を組織。

1873　カナダ・ウェスレーアン・メソジスト教会の日本伝道開始。初めての外国伝道地。ジョージ・カックランとデビッドソン・マクドナルドを日本に派遣。

1874　ウェスレーアン・メソジスト教会、カナダ・ウェスレーアン・メソジスト教会、メソジスト・ニュー・コネクション教会の三教団が合同「カナダ・メソジスト教会」と呼ばれる。日本伝道引き継がれる。

この後、カックランは横浜で伝道し、中村敬干（正直）と出会います。マクドナルドは東京・静岡で伝道し、信者が多数生まれていきます。

1875　平岩愃保（のちの東洋英和女学校の設立者）カックランより受洗。

1876　カックランの要請に応え、カナダ・メソジスト教会は、ジョージ・ミーチャム夫妻とその家族、チャールズ・イビー夫妻と日本に派遣・カックラン・マクドナルド、イビー、ミーチャムの四人で正式な日本部会を開催。

そして、ミーチャムは沼津に、イビーは、東京、山梨で伝道します。東洋英和女学校の最初の校主小林光泰は1878年暮に甲府でイビーから受洗しました。一方、宣教師夫人たちによって、女子教育、女子の伝道が始められ、婦人宣教師の派遣要請が出されます。1878年にカナダ・メソジスト教会全国大会で、中央伝道局が、婦人組織の組織化の可能性を探る試行を正式に認めて以降、熱心な運動により、1881年、全カナダに婦人伝道会社を結成する決意が表明されます。このカナダ・メソジスト教会伝道会社の委員会の意志に応え、ミス・カートメルが外国伝道の婦人宣教師に任命されました。1882年９月、ハミルトンのセンテナリー教会でのことでした。

1882　ミス・カートメル横浜上陸。

1883　イビー、日本渡来の全メソジスト派の大合同を首唱、キリスト教主義学校を盛大ならしめ、日本にキリスト教主義の一大学校を設立することを提唱。帰国して資金の募集に行脚することとなる。

この年、カートメルも本国の伝道会社に女学校設立の必要を訴え、賛意を得ます。そして、この年の秋のマクドナルドによる東京麻布の土地購入に際し、婦人ミッションも、麻布の低地のビール醸造場跡を取得、1884年の10月20日、東洋英和女学校が開校され、東洋英和女学院の歴史が始まります。開校当時の土地購入も校舎建設も全てカナダ婦人伝道会社の資金によりました。その後、1900年鳥居坂の地に木造四階建てながらも堂々とした新校舎が建設されましたが、この時にもカナダ婦人伝道会社の資金によって、校舎も建てられ土地も購入されています。

1925　カナダ国内約3000の教会が参加して「カナダ合同教会」が成立。カナダ婦人伝道会社は消

滅、「カナダ合同教会婦人伝道会」に実体を移す。

1927　東洋英和女学校の同窓会を中心に新校舎建築のための募金運動おこる。

1929　当面の校舎改築に協力する組織の「東洋英和女学校後援会」の設立を父兄会にて承認。

1933　校舎・幼稚園・寄宿舎（青楓寮）等建築完成。

この1933年に完成した校舎が現校舎の前に建っていた校舎です。この校舎・幼稚園・寄宿舎の総工費の87.6％はカナダ合同教会婦人伝道会の寄付金によりました。

東洋英和女学院の設立は、このようにカナダの婦人ミッションの人々の恩恵によっています。百年以上も前に始まって伝道、学校の設立・校舎改築に当っての資金援助、そして東洋英和を東洋英和たらしめているその教育の基盤。カナダの人々の奇跡のように強く清らかな意志と使命感を、私たち東洋英和に関わる者たちは受け継いでいますし、また次代へと受け渡していかなければいけないのです。このことを忘れずに、これからも、自らに与えられた使命を果たして行きたいと思っております。

カナダ学習旅行に参加して

センテナリー教会で礼拝を捧げた思い出

卒業生　　内藤　由佳

『センテナリー教会の礼拝堂は英和の旧大講堂を思わせる造りだった。その空間で礼拝を守っている間中、私はある種の興奮をおぼえていた。制服に身をつつんでいることもあってか、約百年の時を隔てて、ミス・カートメルをはじめ、英和の創立や教育に尽力された宣教師の先生方と共に礼拝を捧げているように感じられたのである。その感慨深さといったら、英和生としてセンテナリー教会を訪ねることのできた者しか味わえないものであろう。「英和を創立して下さってありがとう」そんな気持ちと共に、自分が英和生であることが奇跡であるような気がした。さらにここにいることは夢のように思えたのであった。礼拝後、そこで校歌を歌った時はいっそう感慨深かった。「…楓よ、楓の園…。」私はそこに英和とセンテナリー教会のつながりを見出して感動した。しかし、このフレーズを聴いてもセンテナリー教会の方々はまさかそれが mapleだとはわからないだろうな、と淋しく思った。もう少し英語が流暢に話せたのなら、歌詞の解説でもしたことだろう。英和側の自己満足でなく、センテナリー教会の皆さんと、その感激を共有したかったからである……。』

第二回カナダ学習旅行に参加してから４年以上経過した今なお、鮮烈によみがえるセンテナリー教会の思い出。この旅行の中で当時最も印象的だった『赤毛のアン』周辺の３日間が次第におぼろげになってきているというのに、センテナリー教会での１～２時間は一向にかすむ気配を見せない。

今思い返してみると、両者のつながりが百十年以上を経た今なお続いていることが驚嘆すべきことなのである。あちらで見せて頂いた膨大な数の手紙や写真のやりとり、また英和の創立者である

ミス・カートメルを記念して『カートメルズ・ルーム』として部屋の名前に残されていること等、英和とセンテナリー教会の深いつながりを感じさせるもののいかに多かったかが今更ながら思い出され、胸が熱くなる。

センテナリー教会の牧師先生が英和に来られたと聞いて、うれしく思っている。英和のことをもっとよく知ってほしいという願いがかなったような喜びがあるわけだが、実はそれ以外にももう一つの理由がある。私たち卒業生は「英和が、自分たちが卒業した時のままの英和であり続けてほしい。」と切望するものである。時代が変われば教育方針も変わって当然、建物も変われば、先生方や生徒たちも変わるはずであるが、しかし変わってほしくないと思うわがままさがある。センテナリー教会とのつながりがさらに深まったことを暗示するこのニュースは、私の、変わりゆく英和に対する不安や哀愁の念を和らげてくれた。何か変わっても、カナダのミッションスクールであることの誇りを持ち続けていれば、英和の香りは失われない。そんな安心感を与えてくれたのであった。

『風にそよぐ美しきもの、楓よ、楓の園…。』

楓がつなぐ両者の関係が、これからますます強く、豊かなものとなっていきますように。

滞在日程

平成７年度書記　　土屋　千晶

1996年11月１日（金）

ロジャース先生の御都合により、ルール牧師御夫妻は一足早く、トロントから成田着13：10の便でいらっしゃいました。

お出迎えは、丁度前の年のクリスマスにカナダセンテナリー教会を訪れ、ルール牧師御夫妻ともお会いになられた幼稚園の丹羽先生をはじめ、菊池・浜田・野田・山本各先生、そして高等部教頭でいらっしやった小池先生がして下さいました。

そして、ロジャース先生は途中御用のあったバンクーバーから成田着16：30の便でいらっしゃり、小池先生と前母の会委員２名がお迎えに参りました。

この日は当初の予定と日がずれた為、国際文化会館に部屋をおとりすることができず、竹芝のインターコンチネンタルホテルに泊まられることになっていました。ここで、ロジャース先は、先に着いていらっしゃたルール牧師御夫妻と合流なさったので、ささやかな歓迎の晩餐を持たせていただきました。

ここでルール牧師御夫妻は、中・高等部母の会へのおみやげとして、カナダの美しい写真集を贈呈してくださいました。これは、後日11月５日の母の会委員との会食の折に、あらためて皆様にお見せし、現在は母の会室に大切に置かせて頂いております。

11月２日（土）

この日は、長旅のお疲れをとられますようにと何の予定もいれずに休んでいただく心積もりにしておりましたが、ロジャース先生の御案内で三人お揃いで浅草見物、歌舞伎座へといらっしゃいました。東京の休日を楽しんで下さったことと存じます。

11月３日（日）

この朝に、インターコンチネンタル・ホテル

から鳥居坂の国際文化会館へ移動され、鳥居坂教会の日曜礼拝に御出席になられました。

鳥居坂教会では、礼拝後に歓迎の昼食会を開いて下さいました。

午後には、青山墓地をお訪ねになり、散策も楽しまれました。

11月４日（月）

この日には、昔カナダへの留学を経験なさった方達によって、ルール牧師御夫妻とロジャース先生を囲んでの会食の一時が持たれました。

11月５日（火）

午前中、中等部の礼拝への御出席、授業参観をなさり、続いて幼稚園を訪問されました。

お昼には、中・高等部の両部長先生、教頭先生も出席されて、母の会委員との会食が持たれました。

折しもこの日は、ルール牧師夫人のお誕生日ということで、御一緒に歌を歌いお祝いをいたしました。

この会の後、在校生の金井様のお宅を訪問されひととき、日本の家庭を味わわれました。

11月６日（水）

中・高等部の創立記念式典に御出席下さり、ルール牧師による高等部生徒への講演が行われました。

引き続いて、旧教職員を交えての歓迎昼食会がひらかれました。御夫妻は、午後には銀座での買物を楽しまれました。

11月７日（木）

午前中、小学部を訪問され、英語の授業を見学なさいました。

午後は昨日同様、東京の休日を楽しまれお買物などをなさいました。

11月８日（金）

お昼すぎの新幹線で、関西旅行に御出発。

東京駅頭まで、黒川先生、清野先生、小池先生、母の会委員がお見送りいたしました。

あいにくの雨模様でしたが、ルール牧師御夫妻ロジャース先生共に、大変お元気にお出かけになられました。

11月９日（土）

ロジャース先生の御案内で、タクシーでの京都観光をなさいました。

三十三間堂 ― 二条城 ― 第二日赤 ― 東洋亭 ― 金閣寺 ― 竜安寺と回られました。

11月10日（日）

神戸の教会で日曜礼拝を守られました。

この教会の牧師夫人でいらっしゃるミセス二宮は、カナダの御出身で英和の理事もなさっておられます。長い間、日本の地で牧師夫人として宣教師活動を続けてこられました。

ロジャース先生の、是非ルール牧師御夫妻に会わせたいとの思いで実現いたしました。

11月11日（月）

お忙しい日程をお元気にこなされ、この日関西空港から成田経由でバンクーバーに向けて発たれました。

あとがき

早いもので私達が冬のカナダを訪れたのも四年前の事となってしまいました。その際センテナリーチャーチの高い天井のある礼拝堂に入り、ミスカートメルがいつも座っていらした席にこし掛け深い感慨を覚えました。

（中等部　清野禮・廣井理加幼稚園　菊池みな子）

二年後、お懐しいルール先生ご夫婦とロジャース先生が訪日なさると伺い、早速成田空港までお迎えに上ありました。数日後、幼稚園をお訪ねく

ださった時、憶する事なく子ども達がわぁっと駆け寄り、知っている限りの英語で「ハロー」と話しかけている姿を見て、あらためてお三人のお人柄の暖かさを感じました。

冬期オリンピック開催中、幼稚園の子ども達は旗作りを始めました。白い和紙に赤いクレヨンで丸を書いた後、やはり赤いクレヨンでたどたどしい楓の葉を描きカナダの国旗を作っていました。子ども達の中でもカナダという国が近い存在として受けとめられているのでしょうか。

「史料室だより」の原稿のために「百年史」をひもといておりましたら、昔ながらの東洋英和の「よき光」を感じることができました。自由な明るい校風や教育に真摯にとり組む先生方の姿。一つ一つの出来事に一つ一つ忠実に取り組むことで東洋英和はその存在を神に許されてきた、そのような思いにとらわれました。私が英和に参りまして二年近くになります。史料室のお仕事に関わらせてくださったこと、この「よき光」の中に私をお導きくださったことを、いま、神様に感謝しております。

第一回カナダ学習旅行日程表　1993年　７月19日成田発、８月１日成田着

19日（月）　成田より直行便でカナダのトロントへ　トロントよりキングストンへ
キングストンのクイーンズ大学ヴィクトリアセンター泊

20日（火）　クイーンズ大学にて語学研修　３日間
午前中　レッスン、午後　キングストン周辺の見学

23日（金）　キングストン発　ハミルトン市　センテナリー教会訪問
センテナリー教会でミス・ブラウンの奨励による礼拝を捧げた後教会の方々と交流会があり暖かい歓迎を受ける。
オンタリオ州スコットランドへ　元宣教師のホーニング先生のご紹介でホストファミリーと対面　ホームステイ体験３日間　聖日礼拝出席

26日（月）　スコットランド発　ナイヤガラの滝見学　ケベック着

27日（火）　ケベック市内自主見学　Ｐ．Ｅ．Ｉ．シャーロットタウン着
シャーロットタウンで３泊

28日（水）　プリンスエドワード島のジョージタウンの元牧師メア先生御夫妻のご尽力によりジョージタウンの人々との交流会が行われる。ミセス・メアは宣教師として東洋英和、山梨英和で教鞭をとられた。昨年急逝

29日（木）　グリーンゲイブルズなど「赤毛のアン」ゆかりの地を見学
夜　シャーロットタウンのコンフィデレーションセンターにてミュージカル「赤毛のアン」鑑賞

30日（金）　コンフィデレーションセンターでプレゼンテーションが行われ、村岡花子さんの写真と訳書新潮文庫「赤毛のアン」シリーズを贈呈
トロント市内見学　トロント泊

31日（土）　トロント発帰国